

(2) 建設学科建築学棟改修事業

ア 効果等の把握に関して得られた成果

E 大学建設学科建築学棟は、国際的に第一線で活躍している建築家等によるスタジオ教育を支援するとともに、スタジオ教育実践に向け、「国際的に通用する高度な人材養成を目指す世界で活躍する人材育成」の拠点となるスペースを確保するため、平成 21 年 3 月に完成した（事業の詳細は参考資料参照）。

以下に示す効果発現過程の中で、入手できた定量的なデータは学生数や科学研究費などわずかであった。一方、ヒアリングを通じて、ゼミナールを履修する学生数、企業業からの求人数、就職率、学術誌への掲載件数、学会賞等の受賞件数など、具体的数値は得られなかったが、今後収集・分析を進めることにより、効果の把握が見込まれる指標が多く存在した。

「建物全体が教材」が改修整備のコンセプトである当該施設は、施設整備の計画当初から、学生のアンケートや教員の意向を十分に勘案することで、利用者のニーズを汲み取った施設になっている。

また、スタジオ教育により、密度の高い教育研究環境を提供することで、専門的な教育効果や研究分野の裾野が拡大しており、教育や研究にとどまらず、地域貢献や国際化推進の分野にまで効果が波及している。当該施設の事例では、施設整備のニーズ分析のみならず、具体的な指標を十分に検討し、継続して管理しておくことが、施設整備の効果を検証する重要な要素であるといえる。

イ 施設概要

(ア) 建物規模・工事費

構造	: SRC8-1
建築面積	: 387 m ²
延床面積	: 2,989 m ²
工事費	: 415,268.7 千円

(イ) 主要用途

建築学系教員室，研究室，スタジオ，図書室，事務室
都市イノベーション学府事務室

(ウ) スタッフ

教員：約 20 人，職員：約 10 人

ウ 教育研究上の背景

「世界トップレベルの研究拠点づくり」を推進するため、国際的に第一線で活躍している建築家等によるスタジオ教育(平成 18 年特色ある大学教育支援プログラム採択)を支援するとともに、大学院を中心とした教育研究に重点を置き、「国際的に

通用する高度な人材養成を目指す世界で活躍する人材育成」の拠点となるスペースを確保することが求められていた。

エ 施設整備の課題とその短期的アウトカム指標

(ア) 教育

- ・当該施設は、老朽化が著しく耐震性に問題があったため、危険性が高い状態であった。このため、老朽改善及び耐震補強の整備を行うことによって安全・安心な教育研究環境の整備を目指す。
- ・改修前のアンケートや教員中心とする教室会議から、国際的に通用する人材養成を行うためには、スタジオ教育を実施するスペースの確保が施設整備の重要な課題となった。そこで、当該施設は、「建物全体を教材」として施設全体をグリーンビル化することに加えて、スペースの再配置・機能改善、共同利用スペースの確保により、スタジオ教育に向けた教育研究の環境整備をすることとなった。
- ・改修事業により、教育の重要基盤となるスタジオ・ラウンジ数を、学部生用として 6 室、大学院生用として 5 室整備した。また学内で多様な用途に使用できる共同利用スペースとして、大会議室を 1 室、レクチャーゼミ室を 1 室、それぞれ整備した。
- ・これらの施設整備により専門的な教育機会が増加し、短期的アウトカム指標である大学院修士課程志願者数が 197 名（平成 23 年度）から 257 名（平成 24 年度）に増加したことを確認できた。
- ・このほか、データの収集、確認はできなかったが、企業からの求人数や就職者数、就職率を短期的アウトカム指標として設定することにより、今後、専門的教育機会の増加が施設整備による教育研究上の効果として確認できる可能性がある。

(イ) 研究

- ・改修事業により、教育の重要基盤となるスタジオ・ラウンジ数を、学部生用として 6 室、大学院生用として 5 室整備した。また学内で多様な用途に使用できる共同利用スペースとして、大会議室を 1 室、レクチャーゼミ室を 1 室、それぞれ整備した。
- ・これらの施設整備により、若手研究者の研究意欲が向上し、短期的アウトカム指標である大学院博士課程志願者数が 16 名（平成 23 年度）から 20 名（平成 24 年度）に増加したことが確認できた。
- ・また、研究成果の質の向上や研究分野の裾野が拡大したことを示す短期的アウトカム指標である外部資金（共同研究、受託研究、受託事業、補助金、科学研究費、寄付金の合計）獲得件数は、平成 20 年度、平成 23 年度ともに 37 件であった。また同じく外部資金獲得額は、平成 20 年度が 60,802 千円、平成 23

年度が 34,309 千円となった。これらのことから、獲得件数が維持できているものの、施設整備の効果として外部資金獲得が増加するとは限らないことがいえる。

- ・このほか、データの収集、確認はできなかったが、学術誌への掲載件数、学会賞等の受賞件数、外部発表の件数を短期的アウトカム指標として設定することにより、今後、独創的な研究テーマの増加が施設整備による教育研究上の効果として確認できる可能性がある。

(ウ) 地域貢献

- ・改修事業により、教育の重要基盤となるスタジオ・ラウンジ数を、学部生用として 6 室、大学院生用として 5 室整備した。また学内で多様な用途に使用できる共同利用スペースとして、大会議室を 1 室、レクチャーゼミ室を 1 室、それぞれ整備した。
- ・これらの施設整備により、共同研究が増加し、短期的アウトカム指標である共同研究の件数が 5 件（平成 20 年度）から 6 件（平成 23 年度）に増加したことが確認できた。
- ・また、関連研究テーマが増加し、短期的アウトカム指標である受託研究の件数が 1 件（平成 20 年度）から 3 件（平成 23 年度）に増加したことが確認できた。

(エ) 国際化推進

- ・改修事業により、教育の重要基盤となるスタジオ・ラウンジ数を、学部生用として 6 室、大学院生用として 5 室整備した。また学内で多様な用途に使用できる共同利用スペースとして、大会議室を 1 室、レクチャーゼミ室を 1 室、それぞれ整備した。
- ・これらの施設整備により、留学生数が増加し、短期的アウトカム指標である大学院修士課程を志願した留学生数が 30 名（平成 23 年度）から 32 名（平成 24 年度）に増加したことが確認できた。
- ・同様に、大学院博士課程を志願した留学生数が 8 名（平成 23 年度）から 11 名（平成 24 年度）に増加したことが確認できた。
- ・このほか、データの収集、確認はできなかったが、海外のコンペ参加回数を短期的アウトカム指標として設定することにより、今後、現地で海外の建築家と接する機会が増加することが考えられる。これにより、国際化に関心を持つ学生の増加や国際的に注目される研究成果の実現が施設整備による教育研究上の効果として確認できる可能性がある。

オ 施設整備の効果指標に対する大学の意見

- ・ゼミナールを履修する学生数、企業からの求人数、就職率、学術誌への掲載件数、学会賞等の受賞件数のデータについては、今後収集は可能であり、指標として有

用と見込まれる。

- ・即戦力となる指標は現状ははっきりしないが，長期的にみれば共同研究や寄付金に関係してくるのではないかと考察される。
- ・施設整備により学生の定員数が増加することはない。定員数は全体的に変動なし。
- ・施設整備から 6 年経過したが，効果については，今年度の修士の卒業生の進路などの結果をみて初めてわかると考えている。

カ E 大学建設学科建築学棟改修事業の効果発現過程（別表）

E大学建設学科建築学棟改修事業の効果発現シナリオ

